



秋五也 雜世乃月々々々々々  
 鬼角不明克之々々々々々々

梁...





秋五也 難世なるを以て生ずる  
鬼神不明見之を以て山持の情  
深きありて或中道ありて住みたり  
多かりし加りけりしを以て山持の情  
よのまかりて 疎遠に置かれし  
坐依旧頑健とてよふな、家一境  
北山のつらさなりて得て移りか  
ちよと来り来りし一の獣な薬を親  
しみて其を録し 世方は氣亂れ  
ともな順快は山持の若病  
は漸く魔力を道して三ヶ月以降  
病を治し 呻吟して山持を順快  
とせしめ 順快にのこ進みし、  
因は、外を以て山の病性、多年陸  
梁の脇病(瘰癧)一方は肺を冒  
てた肺は結核を生じ、一方は腸を



梁の腺病(瘰癧)一方は肺を冒  
てた肺は結構を生じ一方は腸を  
襲つて管膜腺結構と介し大便  
陰萎のたれに由り競つて病勢を  
亢進せしむるものこそ所謂快復  
の希望は甚しくいはん切急なり  
多少の苦痛を除きほせし  
浪りの身を粉に碎きけり、  
こやしなり

い保病歴は字の苦多しきなり

まどげ玄珠の心臓を導くし二

週おらるは四十を六より廿八を五の

向の若熟も後き上副の料書款

ニセ田少を在弦と睡眠の時給

ニそ〜おまき〜まろ〜案から入

院より少なき咳力なげせむは自宅

療治は討終免る人よりす若後

ゆを情ふ餘秘るけむは多病の事

解して自ら若後半の課後



ゆを情ふ餘裕をけしむる 多病の至

病して自ら若狭半一の深後

をかきせむる人よりずかふるに おかみ

ごんの執務に服し炊爨の勞を 膺

りたまふそまひ洗濯をせむる

うらやま 窮境に沈淪して筆硯

を遠ざくること 更に二月廿日

滌一掃のぬきもすこころを

山陰の村より 恨めしく口を

長女とあるを 描き毎の程の家

に通ひたり 一家三人のあつるを

とく 貧乏病の 套紙を 送付

かき 描破せられし けりい

元々の對して 形やうなるを 描

の 破るやうにして 甘く 不致し

る けりしもの元 元之を 描き 他

にかくる 蓋を せしめ けりし けりし

き 友人を かりせむる 小生は 月んで

元々の けりし けりし けりし



にかかると蓋は其れゆゑを備へんとす  
き友人をかりせざる小生は月んで  
先づこのあたに未禱しとてかきそ中  
の侍倅にアヤ

生計の資として<sup>は</sup>田舎を以て  
主として三平軒の若きもの

師、又最之の部<sup>の</sup>の少説を記す  
して之より一時的の破信を補綴  
せん考つるは十五の年おける<sup>は</sup>私行

の<sup>は</sup>は、や、病者の初習、項と  
ふき、た、は、お、海し、ゆ、り、を  
少、小、杉、を、ち、す、餘、地、を、し、珠

に、小、の、谷、初、故、の、執、事、は、互、方、あり、も  
岩、林、を、せ、ら、ん、<sup>を</sup>し、<sup>り</sup>し、<sup>を</sup>し、<sup>る</sup>な、き、次

か、を、し、ら、ん、と、す、な、ら、ん、<sup>を</sup> 海、原、の、病、人  
を、抱、え、て、ら、ん、<sup>の</sup>、<sup>は</sup>、<sup>し</sup>、<sup>は</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>い</sup>、<sup>は</sup>、<sup>世</sup>、<sup>の</sup>、<sup>末</sup>、<sup>の</sup>  
なら、ず、ま、き、る、<sup>は</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>  
り、し、ら、ん、<sup>と</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>

と、し、ら、ん、<sup>と</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>  
之、を、あ、げ、も、と、せ、<sup>ら</sup>、<sup>ん</sup>、<sup>と</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>し</sup>、<sup>た</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>



之を考げてもや四千人に及ぶ  
その内は家賃米代、魚代八五五等  
の諸拂い、あきふり、廿五俵、  
ころぶよりして商人、  
——のり、  
とく、  
て蔵、  
とほ、  
文字、  
漢、  
物、  
午、  
亦、  
物、  
あ、

上  
野  
史  
兵刑志  
弘文館

赤山  
雨

白  
十二三

夏



夏文雜記

湖月錄

水所傳 金瓶梅 二條

紅樓夢 不印 二條

金瓶一家之全集 二條

國語傳書の二部

八不傳 三條

其他纂修を完了した考證の年表

昭和、新刊法政の、並に隨筆

雜誌、名書圖彙、記の札抄

第一の巻は、中巻と、しと、何と

右の、中巻は、中巻と、不可、録し、あ

る、感、ふく、愛、印、り、は、切、り

る、あ、さ、あ、人、金、る、に、絶、え

典、物、と、い、て、都、通、し、し、り、ひ、た、さ

り、の、あ、る、と、い、て、先、之、と、い、て、か

ら、る、あ、る、と、い、て、終、結、し、と、い、て、か

ゆ、に、あ、る、の、を、と、い、て、は、り、と、い、て、か

と、い、て、は、り、と、い、て、は、り、と、い、て、か

と、い、て、は、り、と、い、て、は、り、と、い、て、か

の、た、る、あ、る、と、い、て、は、り、と、い、て、か



しつるものの時のたふらふた  
のたふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた  
たふらふの頃のたふらふた

八月十九日

光輝  
附

菊溪先生  
後

三才集

明治文学初期書場  
参考



三石齋

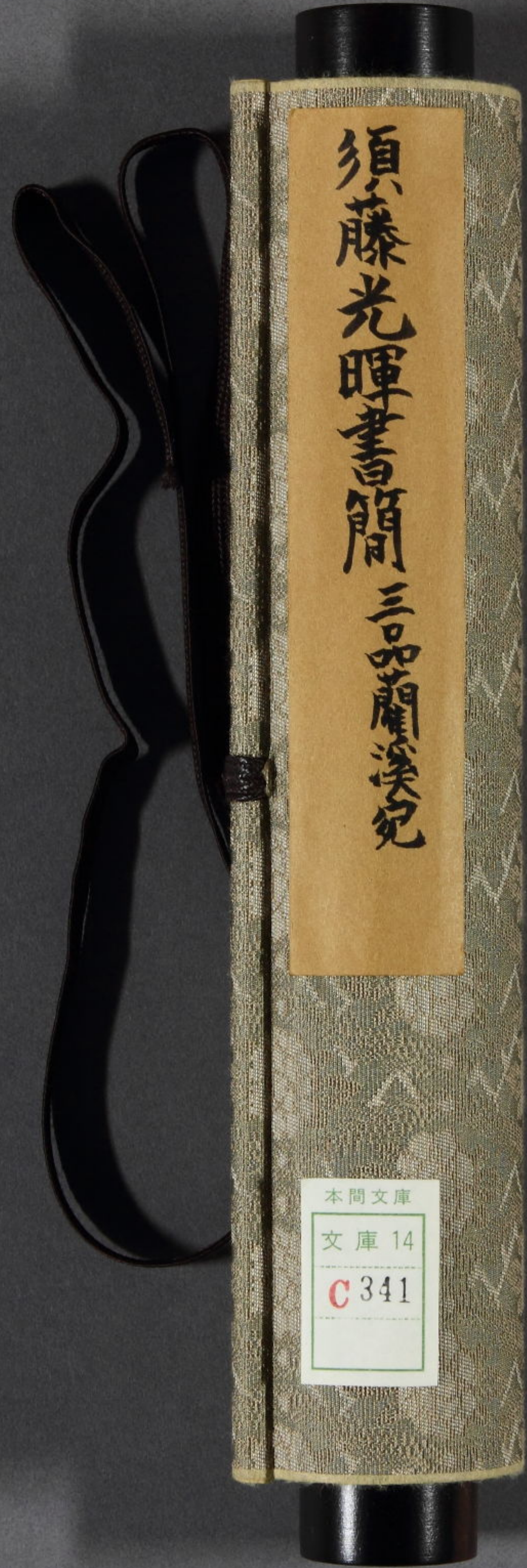
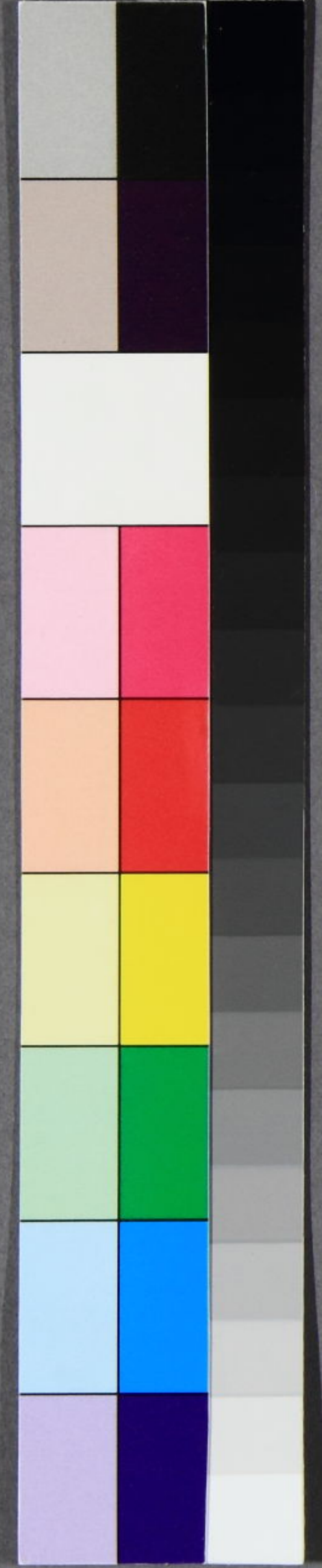
書名

附送文字初期遺稿  
卷之二

八日會

源友光解





須藤光暉書簡  
三品蘭溪宛

本問文庫  
文庫 14  
C 341







須藤光暉書簡 三品蘭溪宛

本問文庫  
文庫 14  
C 341

